雑がみ掘り起こしへ！

～紙リサイクルを取り巻く課題解決へ向けて～

第11回　雑がみ掘り起こし啓発、2026年は「実装段階」へ

（公財）古紙再生促進センター
専務理事
川上正智

全国各地で展開した「雑がみさまを探せ！」啓発実験

家庭から排出される可燃ごみの中には、いまなお多くの雑がみが含まれている。紙箱、包装紙、チラシ、ノート、封筒、紙芯、紙袋など、本来は資源として循環可能であるにもかかわらず、「分別がわかりにくい」「量が少ない」「つい可燃ごみに出してしまう」といった理由から、焼却処理されているのが実情である。多くの自治体が可燃ごみ削減を重要施策に掲げる中で、雑がみは認識されながらも現状以上の分別が、必ずしも思うように進まない分野と言える。

古紙再生促進センターでは、生活者の理解と行動を着目すべき課題と捉え、社会啓発実験「雑がみさまを探せ！」を昨年夏より全国各地で段階的に開始した。本取り組みは、特定の先進自治体をモデルとするものではない。学校、地域イベント、大学、環境フェア、スポーツ大会など、日常のさまざまな場に啓発の仕掛けを持ち込み、人々の反応や行動の変化を観察し、その知見を積み重ねていく現場起点の実践である。

昨夏以降、約50カ所・延べ2万人へのアプローチ

これまでに全国約50カ所にて啓発実験を行い、延べ2万人を超える方々に雑がみへの気づきを届けてきた。現場で重視しているのは、わかりやすい分別方法のヒントのみならず、チラシや啓発袋の図解を手がかりに、参加者自身が手に取った紙を見て、「これは資源か」「これは違うか」と考え、実際に分別してみる。その過程で自然と会話が生まれ、「これも紙だったのか」「家では燃えるごみに出していた」といった率直な気づきが共有される。知識として理解するのではなく、体験として納得することが、次の行動につながっていくことを模索した。

小学校での実践は、その効果が最もわかりやすく表れる場である。登校時や校内の一角が、特別な設備や準備を必要とせず、資源循環の現場へと変わる。子どもたちは友だち同士で確認し合いながら雑がみを集め、その体験を家庭に持ち帰る。「これは雑がみだよ」「次は分けてみよう」といった会話が家庭内で交わされることで、可燃ごみ削減の取り組みが生活の中に自然に組み込まれていく。

地域イベントや展示会では、雑がみ啓発は来場者が立ち止まり、対話を生む入口となる。環境問題への関心の有無にかかわらず、多様な人々が紙リサイクルに触れる機会が生まれる。大学キャンパスでは学生の主体的な関与が次世代の担い手育成につながり、スポーツ大会や復興支援イベントでは、家族単位、地域単位での参加が啓発の裾野を広げることを探った。

啓発の手応えと次に求められる視点

こうした取り組みが昨年夏以降、数カ月にわたり全国各地で積み重ねられてきた。量や配布枚数といった数値だけでなく、どの場面で人が足を止め、誰が行動につなげ、どのように家庭や地域へ波及していくのかという現場知見が蓄積されつつある。一方で、こうした気づきが実際の分別行動や可燃ごみ削減につながっているのかについては、今後、継続的に追っていく必要がある。啓発を「実施したかどうか」ではなく、「行動がどう変わったか」という視点で捉え直すことが、次の段階に向けた重要な課題である。

これらを踏まえると、従来型の単発的なイベントでの配布のみに留める啓発のあり方は、再考が求められる。学校教育、地域活動、既存の行政施策などに雑がみ啓発を組み込み、繰り返し触れる機会をどう設けるかが、今後の鍵となると考える。今年の夏頃までには、各地で実施した啓発実験を整理した事例集を取りまとめ、全国1700あまりの自治体に向けて情報提供を行う予定である。この事例集は、成功例を示すための

ものではなく、地域特性や既存施策に照らしながら、雑がみ掘り起こしに向けた新たな試みを検討するための実践的な資料としてお役に立てればと考えている。

震災復興いしかわ小中学生リフレッシュスポーツ祭 in 七尾（協力・金沢文化スポーツコミッション）

福島SDGs未来博
（協力・㈱こんの）

雑がみ掘り起こしは、啓発物を配布すれば成果が出るような単純な取り組みではない。人が気づき、手を動かし、その行動が日常の中で繰り返されて初めて、可燃ごみ削減という成果につながる。全国各地での啓発実験を通じて明らかになってきたのは、雑がみが「分別しにくい資源」ではなく、「行動変容を引き出す入口」になり得るという点である。今後は、現場で得られた知見を自治体や関係者の皆様と共有し、それぞれの地域に合った形で実装していく段階に入る。雑がみを媒介に、人と地域がつながり、可燃ごみ削減が日常の取り組みとして根づいていく。そのプロセスを、引き続き現場とともに積み重ねていきたい。

エコプロ2025
（協力・跡見学園女子大学）

北九州エコライフステージ
（協力・古紙センター九州地区委員会）

古紙再生促進センター
雑がみ分別啓発・社会実験キャラクター（2025）

荒川区での事例報道
（地元ケーブルテレビ８分16秒から）

富士市立田子浦小学校

今後は、行政、学校、事業者、市民が、それぞれの立場で無理なく関われる仕組みを積み重ね、雑がみ啓発を一過性に終わらせないことが求められる。地域の実情に応じた工夫と継続こそが、可燃ごみ削減の成否を分ける。短期間で成果を測るのではなく、日常の小さな行動の積み重ねをどう支えるかが重要である。その入口としての雑がみ啓発は、今後の循環型社会づくりにおいて、ますます重要な役割を担っていく。本取り組みが各地で工夫され、点が線になり、面になり、広がっていくことを期待したい。

昨年4月より連載の機会をいただいた本企画も、次号が12回目、最終回となる。今後の当センター活動についての思いをまとめたい。**W**